

Hard Times

— Gradgrind と功利主義の破綻 —

本 田 三 男

Hard Times

— Gradgrind and Breaking Down His Utilitarianism —

Mitsuo Honda

I

1916年 I. C. McCormick は *Hard Times* について、次の様に述べている。

It is not an uncommon thing to find *Hard Times* a neglected book by many Dickens enthusiasts, and they have either not read it, or without hesitation have put it down as one of the novelist's poorest books. George Gissing in his *Critical Study of Dickens* only makes a few passing references to it, all of which are of an uncomplimentary character. Personally, in reading *Hard Times*, I have felt all the emotions a noble book can rouse in one; the emotions of sorrow, joy, anger, and love towards mankind.¹⁾

これは、作品が書かれてから60年後の Dickens 研究者達の *Hard Times* に対する評価を知るという歴史的意味だけでなく、もっと奥の深い、この作品の本質を暗示している言葉に思える。と言うのも、不思議な事に、*Hard Times* に対する評価は、60年前発表された当時から、McCormick が上記の論評を行った時代も、それどころか20世紀も終わろうとしている現在に至るまで、それほどの変化が見られないからである。ある意味では、ほぼ一世紀半に渡って同様の評価がなされ続けている事実の中に、この作品は Dickens の成功作ではなかったと言う証明を見る事が出来るのかも知れない²⁾。

産業革命を世界で初めて経験し、利益の追求を旗印に、あまりに急速に走り続けた19世紀の英国は、その矛盾の後追いとして幾多の社会問題、人権問題を抱え、多くの名も無く力も無い弱者の悲惨な犠牲のもとに、遅ればせながらそれらの問題を一つ一つ解決して行かざるを得なかった。いや、解決されたとは言えないまでも、その為の努力を続けざるを得なかった。

当初はテクノロジーの発達により人間の生活がより便利により快適になると信じて疑わなかったのに、便利になる事により気付いて見るとそれ以前に比べ、不幸な人々が増加し、悲惨な状況が湧いて出て、社会と言う組織体としてそれを整理出来なくなってしまった。産業活動や資本はそれ自体、拡大しないではいられない特質を持っているが、人間の幸福の為にとのお題目で始まったものが、その拡大の過程で平然と人の心を踏みにじり、逆にかけて無かったほどの不幸を生み出す。人間は本来無駄と寛ぎを必要とするのに、一日の生活の中の無駄な部分が次々と切り捨てられて行き、ほっとする瞬間、何の生産性も無いように思われる時間が削り取られて行く。それに耐えられない者は敗北者としてうち捨てられてしまう。*Hard Times* で

描かれる世界はその様な世界であろう。銀行家 Bounderby は強者の典型であり、誠実で真摯に生きているのに悲劇的の死を向える Blackpool は弱者の代表格である。舞台となる Coketown も又、*Silas Marner* の最終章で示される町の風景同様、煙突から絶え間なく吐き出されるものすごい量の煤煙によって太陽の光さえ届かない。町そのものが一つの妖怪のように、人々の心に強大な負の影響を与え、それを支配している。

かって、ロシア革命の後ロシアに招かれ、共産主義に人類の歩むべき理想の姿を夢見、感激したと言われる G. B. Shaw が、この作品をその様な視点で捉え、*But England is full of Bounderbys and Podsnaps and Gradgrinds;*³⁾と語り、この作品を評価しているのも頷ける。Shaw はさらにこの作品について、

The Old Curiosity Shop was written to amuse you, entertain you, touch you; and it succeeded. *Hard Times* was written to make you uncomfortable; and it will make you uncomfortable (and serve you right) though it will perhaps interest you more, and certainly leave a deeper scar on you, than any two of its forerunners.⁴⁾

とも述べているが、それも彼の視点から見れば当然であり、彼がこの作品のテーマを資本家と労働者の問題として捉え、評価したは必然であったと言えよう。

読者がある作品を読む時、その作品を自己の思想や信念に基いて分析し、作品中の‘自己の問題’の個所から感銘を受けるのは自然だ。だがその事と作者の意図がどこにあったかとは必ずしも結びつくとは限らない。少なくとも Shaw が Bounderby と Gradgrind を同列に置き論じたのは間違いである様に思える。何故なら Bounderby は Coketown の妖気を吸い、それを喜び、Coketown の申子として描かれ続けているのに対し、Gradgrind は異なる重要な役割を持っているからである。

政治家 Gradgrind の子ども達 Louisa と Tom は、父親から常に、‘万事において不思議とってはならない。大切なのは事実だけだ。’と教育される。この段階では確かに Gradgrind は Bounderby と同じ位置にいる。しかし筋の展開とともに、誰よりも不思議を感じる人物は Gradgrind その人である事が読者には見えて来る。その意味で Dickens は決して両者を同列に置いてはいないと言えよう。

Hard Times が、慣例となっていた月刊の形を取らず、週刊の形で *Household Words* に発表されたのは1854年4月1日から8月12日までであった。前年 Dickens は *Bleak House* を完成させ、いつものように心身ともにくたくたになっており、友人の Wilkie Collins や Augustus Egg とともに2ヶ月のスイス、イタリア旅行に出かけた。だがこの時期、1853年9月末彼は、*Child History of England* を書き上げ、同年10月1日(土曜日)の *Household Words* に、*Frauds on the Fairies* と題する小品を発表している。その冒頭で彼は、

In an utilitarian age, of all other times, it is a matter of grave importance that Fairy tales should be respected. Our English red tape is too magnificently red ever to be employed in the typing up of such trifles, but every one who has considered the subject knows full well that a nation without fancy, without some romance, never did, never can, never will, hold a great place under the sun.⁵⁾

と述べているが、この小品を読んで読者は、大作 *Bleak House* 完成直後すでに Dickens の文筆家としての本能が休む間も与えず、次のテーマ・関心を彼の心の中に生じさせている事に気付く。何故なら、ここで語られて行く精神はそのまま *Hard Times* のテーマと重なり合っている

からである。

多くの読者にとって *Hard Times* のテーマは、近代産業社会の欠陥や問題点を告発する点にあると考えられており、同時に教育の問題、功利主義に対する反発・問い掛けが描かれて行くとして理解されている。又 Louisa と Bounderby の結婚から窺い知れる極端な描写から、あるいは、真摯で堅実な生活を送りたいと願い、そうしているのに、不幸で悲惨な人生を歩まざるを得ない Blackpool と Rachael の描写から、不幸な結婚や離婚について作者が悩み続けて来た現実が色濃く滲み出ている作品である⁶⁾と考えられている。おそらくそれも当たっているだろう。明らかにそれらの問題は作品の主要な構成要素であり、それらを抜きにしては作品について語れないだろう。だがすでに触れたように作者のこの時期の関心は、上記の小品の中でいみじくも彼がタイトルを付したように、'Frauds on the Fairies' にあったのではなかろうかと思われる。

若しそうであるなら、*Hard Times* の中で 'Frauds' は何を指し、'Fairies' とは誰を意味するかを考えなければならない。

作品中明確に読み取れる教育や功利主義の問題に関する作者の姿勢。煤煙で覆い尽くされ、日の光もさし込まない Coketown に象徴される産業第一主義の恐さと矛盾。これらの表面的だが圧倒的な重く暗いテーマを背負いながら、なおもがき続ける登場人物達。彼等に救いがあるとすれば、それは Dickens の視点があまりに非人間的町を舞台に選び、その町の妖気に支配され続ける登場人物達を描いて見せながら、それでもきちんと素朴な人間の心、人間の感情に向けられていると言う点にあるのではなかろうか。

II

事実や実績偏重の功利主義が支配する町 Coketown。瞬時も休む事なく吐き出される煤煙。太陽の光は遮られ、木々の緑や小鳥の囀り、又小川のせせらぎと言った、およそ自然の入り込む余地のない殺伐とした Coketown。人の心に安らぎを与えてくれず、遊び心の育たない破壊の町 Coketown の魔力に取り憑かれ、今やその意志を人間代表として具現化させている人物は Gradgrind と Bounderby だと言って良からう。少なくとも Book I で描かれて行く二人の姿は、時に Gradgrind が Bounderby であっても、又その逆であっても何の不都合も感じられない。二人に取って何よりも大切な事は '成功' であり、その為には事実を重視し、すべてに明確な解答を求め、曖昧なもの、戸惑い、迷いは全て切り捨てられる。結果として、二人の思考や論理に '感情' の入る余地は無く、万事に即座に適切な答えを出し成果を得る事。それが二人の求める唯一のものとなる。この論理は勝者の論理であり、それは間違いなく Coketown の資本の論理そのものであろう。Coketown に取って最終の目的は利潤の追求であり、その為には個々の人間の悲しみや苦悩は平然と切り捨てられる。

Book I, Chapter V で Coketown は次の様に描かれる。

It was a town of red brick, or of brick that would have been red if the smoke and ashes had allowed it; but as matters stood it was a town of unnatural red and black like the painted face of a savage. It was a town of machinery and tall chimneys, out of which interminable serpents of smoke trailed themselves for ever and ever, and never got uncoiled.⁷⁾ (p. 17)

ここで語られる町の姿はまさに寓意的と言えよう。「町には大きな通りが7、8筋走っていて、そのどれもがとても似かよっていた。」この画一性には効率重視の精神が貫かれており、いかに無駄なく利潤を上げるかが考えられている。町の学校の名は M'Choakumchild School で、そ

の名前に違わず子ども達の心を窒息させている。

もちろん大人の論理に照らして見れば、次々と事実を教え込み、全て無駄と思えるものは切り捨て、利益追求に邁進する子どもの育成が、最後には彼等自身の幸福に繋がる事になるのだろうが、Dickens は大いなる皮肉を込めて、それを徹底的に容赦なく描いて行く。

作者のこの姿勢は、あまりにも極端で寓意性が過ぎ、現実離れしている様に感じられはするが、同時に、過去多くの作品の中で登場人物の姿を、作中から抜け出して来ると感じさせるほどリアルに描いて見せた事実を知る読者は、かえってその非現実的人物設定の中に、隠された大きな作者の意図があるのではないかと思わずにはおれない。

容赦ない、過酷とも思える教育現場の描写の対極として、サーカス団で暮す心優しい少女 *Sissey Jupe* が登場する。彼女は明らかに、他の子ども達や *Coketown* の妖気を吸って生きている大人達とはかけ離れた存在だ。彼女の心には空想や夢があり、人の心の痛みを本能的に感じ取る力がある。教室での問いに対する模範的紋切型の解答は出せなくても、人間としての突飛で魅力的な発想があり、その根底には無私の愛がある。従って、サーカス団の現役として自分の力の限界を知り、*Sissey* の為に彼女の前から姿を消す父親 *Jupe* と彼女との父娘関係は、この作品の中でも強力なインパクトを読者に与えるものとなっている。貧しく、哀れで、読者の涙をさそわずにはおかない父娘の将来が、どのように展開し、どんな *Dickens* 的結末を向かえるのか。読者の関心はその一点に向けられる。

Hard Times の中にはこの父娘関係の他に、親子の関係を描きなお作品のテーマに係わるものとして軽視出来ない描写が二つある。

まず、すでに述べた様に、*Gradgrind* と *Louisa, Tom* との関係がその一つ。*Jupe* 父娘の場合には、両者の強い絆・愛情が作品を通して一貫して描かれており、少しの変化も見られない。それどころか、あまりに理想的描写で、*Dickens* が作中に父親を登場させる事が出来ないほどの関係と言えよう。作品の途中又は最終の場面で、実際に *Jupe* が登場し、父娘の感激の再開場面を作者が設定していたとしたら、あまりにも感傷が過ぎ、作者自身が気恥ずかしい思いをしたにちがいない。そう思われる程この父娘関係は理想化されているように思える。

Gradgrind と二人の姉弟の関係は、*Jupe* 親子のそれに比べより現実的で奥が深いように思える。*Louisa* と *Tom* は何ものに動じない信念を持ち、子どもの教育と幸福を決定するのは自らの義務であり権利であると信じて疑わない父親から、厳格で徹底した教育を受ける。次から次へと果しない量の書物を与えられ、子どもらしい突拍子もない空想を思い浮かべる余裕もない日々を強いられる。*Gradgrind* にしてみれば、甘さを見せれば即座に落伍者となる *Coketown* で成功し生き残って行く為には、膨大な量の事実を知識として修得させ、それを基に諸事に対して明確な決断を下せる子どもに育てたい。その思いがある。その過程で二人が疑問を感じたり不思議だと思うのは、貴重な時間の無駄使い、浪費以外の何ものでもない。そこに貫かれている思想はまさに効率第一の思想であり、その中に父子の感情の入り込む余地はない。

だが *Dickens* は *Gradgrind* の人物像をそのように描いて見せながら、彼の性格設定には曖昧な幅を持たせている。*Louisa* と *Tom* がサーカス一座のテントの下にもぐり込み、必死でサーカスを覗き見している現場を捕まえ自宅に連れ帰る場面はこの作品の中で最も重要な場面の一つであるが、そこで *Gradgrind* は次のように語る。

I am very much vexed by this discovery. I have systematically devoted myself (as you know) to the education of the reason of my family. The reason is (as you know) the only faculty to which education should be addressed. And yet, Bounderby, it would appear from

this unexpected circumstance of today, though in itself a trifling one, as if something had crept into Thomas's and Louisa's minds which is —— or rather, which is not —— I don't know that I can express myself better than by saying —— which has never been intended to be developed, and in which their reason has no part.” (p. 14)

この科白には多くの意味が含まれている。彼の確たる教育方針が分るのがその一つ。次に悩みを打ち合っている人物が Bounderby であると言う事。又この時点では、Gradgrind と Bounderby が全く同じ思想の持ち主として描かれている事。最後に、それでもなお作者はこの場で、Gradgrind と Bounderby は同じ世界には住めない設定であると暗示している事。これらの事全てがこの短い科白の中に含まれていると言えるだろう。つまり二人の子どもに対し、‘不思議と感じてはならない’と言いつづけている Gradgrind が、まさに不思議を感じている。おそらく Bounderby であれば一顧だにせず自己流の答えを見つけていたであろう些事に対して、Gradgrind その人が不思議と思いつづけている。Dickens がこの作品の中にこのエピソードを挿入したのには意味がある。それも作品全体のテーマに繋がる隠された大きな意味がある。そう思われてならない。何れにしても、この場面には Gradgrind と Bounderby の同一性と違いが同時に描かれており、両者の違いは以後次第に大きくなって行く。Bounderby がある意味で Sissy 同様不変のキャラクターとして機能するのにに対し、Gradgrind は唯一登場人物の中で際立って魅力的、悩めるキャラクターとして、大きな存在となる兆しが示されている。

作品にはそれ程重要でもないもう一つの親子関係が描かれている。Bounderby と彼の母親の描写がそれである。Bounderby はすでに述べたように多くの矛盾を内包した、産業第一主義、功利主義の典型的な人物として描かれて行き、作品中での彼の役割は一貫している。いわば Coketown を代表する象徴的、寓意的な人物と言えよう。成功した——実は単に成り上っただけであるが——自分の能力・思想に絶対の自信を持ち、それを認めない者は平然と切り捨てる。友人 Gradgrind に対してさえ、若し自分の利益に反すると分れば、冷静、冷酷に処理してしまうだろう。その意味で彼の母親のエピソードを作者が織り込まなかったとしたら、おそらく彼は現実離れした魅力のないキャラクターとして終っていた可能性がある。

彼の母親は息子の成功だけを生きる支えにして、ひっそりと田舎に暮らす日々を送っている。そんな彼女の唯一の楽しみは、年に一度 Coketown に向き、遠くから人知れず、名士となった息子の姿を垣間見る事だけだ。彼女には大それた野望は微塵もない。彼女は我欲を捨て、ただ成功者としての Bounderby の存在に喜びを感じている。その意味で Dickens が全く邪心の無い Blackpool, Rachael と彼女の出合いを設定したのには意味がある。三者に共通したものは‘他者を思い遣る’能力だからだ。この能力を有する登場人物は他に Sissy, Jupe, さらに Sleary に代表されるサーカス一座の人々をあげる事が出来よう。さらに言えば Louisa と物語途中からの Gradgrind もこの中に含める事が出来る。何れにしても、Bounderby に対しこのような母親を登場させる事により作者は、Bounderby が単なる紋切り型の登場人物として終るのを防いでいる様に思われる。Bounderby 自身の思想や行動パターンは作品中一貫して不変なのだが、母親の存在によって彼にも人間としての弱さが加味された事になるから。

III

作品冒頭の Sissy Jupe の登場の仕方は衝撃的と言えよう。子ども達の想像力、夢や空想を全面的に否定し、これこそが正解と定めたらそれ以外の解答を認めようとしないう大人の大極端で

厳格な描写が続けば続くほど、その逆の子どもらしい発想、豊かな想像力を持つ Sissey の姿は魅力を増し輝いて見える。Dickens は人間の善を彼女の中に描き込み、彼女の天使のような心で他の登場人物達を救済して行くにちがいないと期待させる。彼女が愛し信頼してやまない‘負け犬’ Jupe に対しても、父はいつの日か自分を向かえに来ると信じ続ける。あらゆる出来事に対する彼女の反応は自然で、彼女の行為の全てには真心が感じ取れる。ところが物語が進んで行くにつれて、不思議な事に、彼女の存在感は薄らいで行く。節目節目に彼女は登場し、回りの人々に影響を与え人々の悩みを和らげるのだから、何故か、当初期待したような存在感と輝きを感じられなくなる。おそらくその理由は彼女の性格が Bounderby 同様、作中であまりにも一定不変なものとして描かれ過ぎている点にあるのではなからうか。彼女は‘善’なる存在の寓意的人物として一貫して不変である。苦しさや悩みは有っても、父 Jupe を思い、それら全てを克服して生きている。言わば Sissey は‘美しくすぎ’、‘強すぎる’のだ。

その意味では、善良な労働者 Blackpool を精神的に愛し続ける Rachael⁸⁾ も同様かも知れない。彼女も又作品の中で、Blackpool の‘天使’であり続ける。I. C. McCormick の言葉を借りれば、‘noble and loving, leading a life of patient loneliness’で、その純粹さと真摯な生き方は、Sissey に勝るとも劣らない。だが彼女も、その性格の‘完全さ’ゆえに、逆に、魅力が失なわれて行く。*Hard Times* の評価が常に分かれ、大多数の読者にとって、それほど成功した作品とは思われない理由の一つはおそらく、主要な登場人物の何人かに見られる完全な寓意性にあるとは言えないだろうか。

このまるで天使のように完全な姿で描写される二人の女性に比べて、不可思議かつ曖昧に語られて行くのは Louisa であろう。彼女は父 Gradgrind の厳しく偏狭な教育方針を間違いだと本能的に感じている。時に小さな反抗を示しても見る。だが基本的には従順で、自分の意にそわない結婚話しも受け入れてしまう。

前述のサーカスの覗き見事件の場面で Louisa は、彼女の性格又は父親との関係を理解する上で重要な反応を見せてくれる。

“It’s all right now, Louisa: it’s all right, young Thomas,” said Mr. Bounderby; “you won’t do so any more. I’ll answer for its being all over with father. Well, Louisa, that’s worth a kiss, isn’t it?” “You can take one, Mr. Bounderby,” returned Louisa, when she had coldly paused, and slowly walked across the room, and ungraciously raised her cheek towards him, with her face turned away. “Always my pet; ain’t you, Louisa?” said Mr. Bounderby. “Good-bye, Louisa!” He went his way, but she stood on the same spot, rubbing the cheek he had kissed, with her handkerchief, until it was burning red. She was still doing this, five minutes afterwards. “What are you about, Koo?” her brother sulkily remonstrated. “You’ll rub a hole in your face.” “You may cut the piece out with your penknife if you like, Tom. I wouldn’t cry!” (p. 16)

ここで示されているのは彼女の Bounderby に対する生理的嫌悪感だが、父 Gradgrind と Bounderby の表面的な同一性の裏に隠されている相違点を明確に感じ取る⁹⁾能力のある彼女が何故、弟 Tom の為とはいえ、父親の言葉に従い、Bounderby との結婚を承諾したのであろう。どう考えても不自然に思えてならない。この違和感に対する答えとして考えられるのは、彼女の人生に対する諦念であろう。Book I で、暖炉の傍らに腰掛け、崩れて行く火を見つめ続ける彼女の姿が繰り返される。弟 Tom にはそれが何故なのか、どうしても理解出来ないのだが、この描写が教えるものは、彼女の彼女の人生や憧れに対する諦めの気持ではなからうか。

Bounderby との結婚に 'Yes' と答えたその瞬間、彼女は自分の希望や夢に冷たい氷の蓋を被せてしまった。

人間の持つ機能の中で未来に対する明確な道筋や解答を提示出来ないこの感情の領域は、父親から意識的強制的に排除され続けたものだ。彼女が時にどのような抵抗のポーズを取ったとしても、その考え方そのものが彼女の精神に染み込んでいる。物静かで冷静であるのは、感情の動きの停止を意味する時もある。不幸にも彼女は、大きな喜びや深い悲しみと言った感情の起伏を経験する機会を、その父親によって完全に奪われて来たのだ。

だが作中の Louisa の役割りを考えて見ると、彼女は Sissy や Rachael よりもはるかに人間臭く、魅力的に感じられる。後で述べる Bounderby 家の家政婦 Sparsit 夫人は、違った意味で、独得の存在感を持つ女性だが、彼女に比べて見ても Louisa は輝いて見える。

Dickens は *Hard Times* の全体構想の中で様々なテーマを取り上げ、産業第一主義に毒された人物達の人間模様を示してくれたが、中でも Louisa や Tom に見られる 'spoiled child' の一断面は、作者が最も関心を持っていた点ではなかろうか。

Sparsit 夫人が脇役として構想されたのは明らかだろう。だが Dickens の他の作品に見られるのと同様に結果として彼女は、大きな存在感を持つ事になる。夫人は誇り高い。成り上り者の銀行家 Bounderby に仕え、表面的には有能で従順、礼儀作法も心得た申し分のない 'lady' として語られて行く。

彼女に関して彼女と Bounderby との奇妙な関係の中に、Dickens は当時の英国の階級意識の問題を描き込んで見せたと言う意見がある。それは的外れとは言えないだろう。かつては名門の娘として生れ、今ではその事実だけが生きる支えの家政婦と典型的成り上がり者の主人。とすれば二人の展開は想像に難くない。

作者は期待通り、いやそれ以上に見事に二人の関係を描いて行く。慇懃無礼だが決して使用人としての立場を超えず主人に接し、操られている様に見せながら Bounderby を操っている Sparsit 夫人の心理。Dickens は誇り高い彼女の心理を見事に描き切っている。だが彼女が存在感を感じさせるのは単にそれだけだからではない。若し Bounderby との関係が '階級意識' の視点からのみ捉えられ、それで終わっているとしたら、彼女も単に一つの '駒' として終る事になる。はるかに年下の Louisa が Bounderby と結婚し、女主人となったその瞬間から夫人の心に生じた女性としての対抗意識。作品後半で詳細に示される彼女の執念は、作者が意図したものかどうかは別として、夫人を強烈なインパクトを与える存在に仕立て上げている。

名家の出身と言う誇りだけで保たれていた精神の安定が、Bounderby の強固な実利至上主義切り捨ての発想の前で、何の役にも立たないと思われ知らされた瞬間に見せた彼女の大変身。その変り身の異常さと、作品前半で見られる貴婦人然とした彼女とのギャップ。それらのものが彼女の魅力を引き出す大きな要素となっている。実際筋の展開のテンポの速さの中で個性を失って行く様に見える主要登場人物達の中であって、作品中盤で異彩を放ち次第に輝きを増す人物は、Sparsit 夫人であると言っても言い過ぎではなかろう。

IV

Hard Times には多くのテーマが織り込まれているのはすでに述べた。それらの中で最後まで一貫して述べられているのはおそらく 'spoiled' の問題であろう。もちろんこの問題は教育のテーマに含まれると言えばそれだけの事かも知れない。しかしここでは Dickens が最も力を込めて考えたと思われる Gradgrind 親子の關係に焦点を当て、'spoiled' について考えて見たい。

Louisa と Tom は父親から同じ厳格さで教育され大きくなった。子ども特有の空想や夢が芽生えかけようとするとそのたびに、悉くそれらは摘み取られて来た。父親が厳し過ぎて母親にそれを補う愛情と抱擁力があれば、又は両親のバランスが取れていれば、子どもは‘spoiled’される事はない。だが Dickens はどうもこの作品の中で意図的に、母親の存在を無視しようとしたのではないかと思える¹⁰⁾。何故なら、彼女と子ども達、彼女と夫との間にはおよそ心の交流と呼べるものは何一つ描かれていないし、彼女の死に関する描写にも家族の哀しみを示す感情は全く示されていないからだ。何故、何の為に母親を登場させたのかと読者が訝らずにはおれない程、彼女の描写は事務的、無機的に記されている。

従って Gradgrind 家では親子関係は父と子の関係を意味する。つまりこの家族の中で‘spoiled’を考えて行く場合、読者は Gradgrind と Louisa, Gradgrind と Tom, Louisa と Tom の関係を考えれば良い事になる。

先ず、Louisa は本質的に Sissey 同様多様な可能性を秘めている。彼女は十分不思議を感じる力がある。好奇心や説明不可能な驚きを感じる能力も持ち合わせている。他者を思い遣り、我を捨てて行動する事も出来る。生理的嫌悪感さえ示していた Bounderby との結婚を承諾した時も、彼女には弟 Tom の為にどの思いがあった。本来なら順調に膨らんで行くはずだった感性の芽をその都度無残にも摘み取り、その替りとして、‘事実’と言う味気ない知識を詰め込んで行ったのは父 Gradgrind であった。

彼女に取って救いは彼女が本能的に父の善意を感知し得た点にある。Gradgrind は全ての行為の根底に、子ども達の幸福を願う気持を持っている。どんなに厳しい教育理念を持ち、それをその通り実践していても、父は自分達を愛している。それを彼女は肌で感じ取っていた。

Mr. Gradgrind, though hard enough, was by no means so rough a man as Mr. Bounderby. His character was not unkind, all things considered; it might have been a very kind one indeed, if he had only made some round mistake in the arithmetic that balanced it, years ago. (pp. 20-21)

この引用は父 Jue に去られた Sissey を憐れみ、彼女を引き取り養育しようと決めた Gradgrind に関する描写であるが、この一文に作品中の彼の役割が凝縮されている。父親の人間性の本質が何であるのか。Louisa も又それを感じ取っていた。厳格一途な父に反発を覚えながら、さらに彼女の全ての感情や人生に対する憧れを冷たい無感動な殻の中に閉じ込める事になったとしても、心底父親を憎み切れない Louisa。その彼女の原点が上記の一文で表現されている。だからこそ彼女は James Harthouse との不倫の恋に傾きかけた時、最後の瞬間には、父に救いを求める行為に出たのだ。その意味で Louisa は常に Gradgrind と精神的に繋っており、真に‘spoiled child’とは言えないのかも知れない。

Gradgrind と Tom の関係は、典型的‘spoiled child’の問題を含んでいる。Tom は Louisa とは異なり Gradgrind の本質が見抜けない。Tom の心に生じた感情は増幅された反発と憎悪の念。ただそれだけだ。さらに不幸な事に、姉 Louisa の愛情も彼には逆効果となる。彼は父親だけでなく Louisa からも‘spoiled’された存在として描かれて行く。

Louisa について Tom が語った次の言葉の中にその事が見事に表現されており、人の心を思い遣れない利己的な Tom の人物像が浮び上って来る。

“Oh,” returned Tom, with contemptuous patronage, “she’s a regular girl. A girl can get on anywhere. She has settled down to the life, and *she* don’t mind. It does just as well as

another. Besides, though Loo is a girl, she's not a common sort of girl. She can shut herself up within herself, and think —— as I have often known her sit and watch the fire —— for an hour at a stretch.” (p. 103)

読者は、何故 Tom が善良な Blackpool を罫にかけ金庫破りの大罪を彼に被せるまでに至ったのか、父 Gradgrind や周囲の大人に対する憎悪の気持は理解出来たとしても、何故 Louisa の真心が読み取れないのか、理解に苦しむ。しかし考えて見れば、Tom のこの人物設定の中にこそ Dickens の天才たる所以が示されているのではなからうか。確かに Tom の描写は中途半端で、消化不良の感じがする。それでも若し彼の中に作者が‘善意’を描き込んでいたとしたら、作品全体がひどく甘いものに成っていた気がする。Tom はいかにもの足りなさを感じさせても自己中心的な Tom で終らなければならない。おそらく作者は彼の姿の中に、悲惨で典型的‘spoiled child’を写し出そうとしたのであろう。周囲の人々の感傷や善意、Sissey の心を持ってしても救われない教育の結果。巨大な怪物 Coketown の放つ妖気は救い難い不幸な状況を Tom の上にもたらした。それを Dickens は語ろうとしたのであろう。

この作品の中で‘spoiled’の問題を考える時、おそらく誰よりも‘spoil’されているのは Gradgrind かも知れない。作品冒頭 Gradgrind が Bounderby と同じ考え方をし、同じ範疇に属する人物として描かれているのはすでに述べた。だが彼は明らかに Bounderby と異なる事も暗示されていた。この二人の設定の差ははたして何の為であったのだろうか。おそらく作者は、何よりも力を込めて‘spoiled’の問題を語る為にこの人物設定を行った様に思える。

Bounderby は一貫して不変の人物として描かれる。本質的に利己的キャラクターとして構想されている彼は、母親に関する人間性を疑うような作り話が露見した後も何ら動じる事もなく Bounderby で有り続ける。世界は彼を中心に回っている。何が起ころうと、彼の利益彼の自己保存の為にだけ彼は考え万事を処理して行く。迷いや苦悩は無い。彼の誇りは何ものによっても傷つけられたりはしない。

ところが Gradgrind の場合、Louisa の心の叫びを聞いた瞬間変身始める。およそ自省と言う言葉に縁などなかったはずの彼が、自己存在に疑問を感じ始める。彼の存在の基盤が揺ぎ、苦悩が始まる。Book I で見られる Sissey を引き取る場面の中に、その他の些細な描写の中に、この彼の変身は準備され暗示されてはいるが、おそらく作中で苦悩し変化する人物として描かれているキャラクターは彼一人であろう。

Harthouse との恋に揺れながら最後の最後に父の家に救いを求めて来た Louisa の次の言葉、

“How could you give me life, and take from me all the inappreciable things that raise it from the state of conscious death? Where are the graces of my soul? Where are the sentiments of my heart? What have you done, O father, what have you done, with the garden that should have bloomed once, in this great wilderness here?” (p. 164)

娘の真実の叫びを示すこの言葉は、自分の思想と生き様に絶対的自信を持っていた Gradgrind の心に痛烈な一撃を与えた。

“Down” と副題のつけられている¹¹⁾物語終盤の、いかにも Dickens らしい父娘のこの会話の場面はおそらく Dickens が、この作品の中で最も描きたいと考えた場面の一つではなからうか。

言葉の上では次々と、感受性や愛情と言った人間に取って大切なものすべてを摘み取り奪い去られて来たと激しく父を責めながら、Louisa の心に怨みや憎しみは無い。Gradgrind の心にも反発や激怒の感情は無い。彼はただ打ちのめされて、極限状態の Louisa の悲痛な叫びをそ

のまま受け止めているだけだ。

ただ Dickens の筆を持ってしても描きたかったと言う事と描き切ったかは別であろう。言葉を越えた意志の疎通の感じられるクライマックスとも言えるこの場面で、読者は何故か物足りなさを感じる。父娘の心は完全に通じ合っており、この章を覆う基調は純粹で高尚だ。だがその純粹さ高尚さ所以に、逆に魅力が損なわれている。場面が観念的、理想的になり過ぎている。Louisa と Harthouse の不倫の現場を突き止めようと躍起になる Sparsit 夫人の圧倒的な迫力が与えてくれる興奮の後では、この涙を誘うはずの父娘の会話の場面は不思議と色褪せて味気なく感じられてしまう。

表面的に Louisa は父親によって 'spoil' されて来た。しかし根底部分で父親と繋がり続けているのだから、真の意味で 'spoiled child' とは言えないだろう。

Tom は父 Gradgrind に 'spoil' された。Gradgrind は自分の予想と期待に反した教育の成果を見せられる事により 'spoil' された。では Gradgrind を 'spoil' しているのは誰であろう。それは Coketown 以外には考えられない。Coketown に象徴される産業第一主義、功利主義の持つ果しない膨張の思想。成果を得る為には無用と思えるもの、理性で答えられないもの、人間の感情のように数値化して示す事の出来ない全てのものを排除しようとする姿勢。人間の幸福に取って不可欠であるのにただ数値化し分析し、それが有用だと証明出来ない、それだけの理由で切り捨てられて行くもの。Coketown が煤煙に塗れながらなお拡大を継続する為にはそう言った領域に属するものは全て、無用どころか邪魔もの以外の何ものでもない。

Coketown に暮らし、より大きな成功を手にしたいと願う Gradgrind が、Coketown の魔力に支配されていたのはごく当然の事だった。

この視点で考えて見ると、*Hard Times* の登場人物は三種類に分類出来よう。Sissey, Rachael, Blackpool, Sleary に代表されるサーカス一座の人々。つまり人間の持つ喜びや哀しみを味わいながら、時には我を捨て他者を思い遣る心を持った人々がその一つ。次いで、その対極として、自己中心的発想と行動を取る者達。この中には当然 Bounderby, Tom, Sparsit 夫人、そして Harthouse が含まれる。最後に、上記二つの性格を併せ持ちながら曖昧な存在として語られて行く者。三番目に属する者達は、その曖昧さの為にそれぞれ独自の描かれ方をしてている。Louisa は本来感受性が強く可能性豊かな少女であったが、それを伸す機会を与えられなかった為に第一の範疇に属す Sissey に反発を感じ、意識的に彼女を避ける。しかし彼女も父親に積年の思いを吐露する事により蟠りも消え、Sissey の世界に入って行く。従って、それ以降語られて行く Louisa は冷静さに穏やかさが加わり、読者に安定感を感じさせる。

作品冒頭の登場場面で Bounderby と同一の思想を持ち、Bounderby が Gradgrind でも、又その逆でもかまわない人物として提示される Gradgrind は、娘 Louisa の悲痛な告発を境にこれ又 Sissey や Blackpool 達の '感情の世界' に組み込まれて行く。従って、以後の描写に於ては、何とか犯罪者 Tom を国外に逃がそうと必死になってはいるが、その心は平穏で、ある意味では彼も Louisa と同列のイメージを与えてくれる。

V

概して Dickens は人間の感情や心理をリアルに描いて見せた作家だと言える。その際に作者自身が登場人物の誰かと同化して感情移入が過ぎ、ペース過多、余りにメロドラマ的要素が強いと批難もされて来た。どんな場所を舞台に選び、どんな構想で複雑に登場人物達を物語の中に織り込んで行っても、最後には彼等の誰かが単なる作中の登場人物の域を越えて、まる

で独得の個性を有する実在の人物であるかのように、読者の心に訴えかけてくれる。それが Dickens の天才たる所以だった。

Hard Times の場合もそれは言えよう。Sissey と Jupe 父娘の描写、Bounderby と Sparsit 夫人、Louisa と Sparsit 夫人の関係の中に人間の悲哀、喜び、時には鬱積され捌けない怨念と言った様々な感情が見事に描かれている。

それでもこの作品には今一つ物足りなさが感じられる。その最大の理由はおそらく、作品のテーマの取り上げ方にあるのではなかろうか。何度も述べて来たように Dickens は、Book I の導入の部分で余りに極端で寓意的、衝撃的場面を設定しすぎた。そもそも教育問題や愛情の問題を大上段に振りかざし、当時の英国を席卷していた功利主義、利益第一主義と対決させようとした姿勢には無理があったのかも知れない。

心優しく健気で芯の強い Sissey、天使のような薄幸の女性 Rachael は、彼女等が作品に登場して来た時大きな期待を読者に抱かせた。ところが物語が進んで行くにつれて二人の存在感は霞んで行き、軽快すぎるテンポの中に埋没してしまったかの印象を与えている。若しこの二人が構想の段階で作者が考えていた 'Fairies' であるとしたら、残念な事に、二人に対する 'frauds' は語られていない。運命の持つ非情さが二人の人生を翻弄しているのは確かだ。だが作者の意図がそこに有ったとは思われない。二人の素晴らしい女性の存在は、作品に取って重要ではあるが全体的には消化不良の感を否めない。

Forbearance, courtesy, consideration for the poor and aged, kind treatment of animals, the love of nature, abhorrence of tyranny and brute force — many such good things have been first nourished in the child's heart by this powerful aid. It has greatly helped to keep us, in some sense, ever young, by preserving through our wordly ways one slender track not overgrown with weeds, where we may walk with children, sharing their delights.¹²⁾

この引用文は 'Frauds on the Fairies' の冒頭で Dickens が語っている言葉で、おそらく、この文を基礎に置き *Hard Times* の全体構想が練られたものと考えられる。作品の中で Gradgrind は正にこの逆を Louisa や Tom に対して行った。

その教育の結果を正視する事で彼は、作品中で唯一人真に悩み自分の思想や行動を変えて行く人物になった。

とすれば Dickens がこの作品に於て何より力点を置き描こうとしたものは、Gradgrind と二人の姉弟の問題であったと推測出来るだろう。又この三人の親子がそれぞれ 'spoil' されている事も見て来た。Louisa は Gradgrind の教育方針によって、Tom は父と姉から同時に 'spoil' されていた。又 Gradgrind 自身は、象徴的町 Coketown の妖気に毒され 'spoil' されていた。

同様の視点で他の登場人物を捉え考えて見ても、この三人以外に 'spoil' されている人物はいない。Sissey や Blackpool, Rachael, さらに Bounderby, Sparsit 夫人に至るまで、各人物の存在の基本的尊厳の部分で 'spoil' された人物は一人もいない。Sissey は一貫して Sissey だし、Bounderby は徹底して Bounderby で有り続ける。その意味では Tom も Tom として描かれている様に思えるが、彼は Gradgrind の負の教育の結果としての役割を与えられている為に、他者とは異なっていると考えた方が良いでしょう。

この様に考えて行くと、この作品の中に Dickens が描こうとした 'Fairies' は Gradgrind と二人の子ども達に絞り込む事が出来るだろう。さらに当然 'frauds' とは事実偏重、利益第一の考え方、つまり功利主義、実利主義そのものになる。

だが、産業革命が進み資本が膨張拡大し、様々な社会矛盾が噴出して人の力ではどうにも御

し難く成って来た社会にあつて、

but every one who has considered the subject knows full well that a nation without fancy, without some romance, never did, never can, never will, hold a great place under the sun.¹³⁾

と言う正論は、それが余りに正論である為にかえって輝きを失う。

人間は不思議な生き物で、分つてはいてもそれが正論で有り過ぎた時、素直に受け入れる事が出来ない傾向にある。Dickens はいつも通り多くの登場人物を複雑にからませ物語を展開させて見せた。Sissey の Jupe に対する愛情と哀れな父への思い遣り、Louisa の父や弟に向けられた愛、又 Sparsit 夫人の主人 Bounderby に対する屈折した思いを美事に描き切った。十分に人間の感情が提示されその大切さが強調された作品に仕立て上げた。

それでも、最も重要なテーマの描き方に於て、余りに正論¹⁴⁾を正論として示し過ぎたのではなからうか。この事が多くの魅力的登場人物の存在にもかかわらず作品全体として今一つ、読者に不満を感じさせる原因となっている様な気がする。

とは言え、140年も以前に書かれた *Hard Times* の提起した問題は、現在でもそのまま生き続けている。我々は依然として同じレベルで同様の社会矛盾と危機を抱えたまま悩み続けている。人間の持つ正の要素、他者に対する思い遣りや謙虚さ、空想やロマンが無用と感じられる時代はあっても、それらは決して無用ではない。それどころかそれら無しでは真の幸福は有り得ない。その Dickens の問い掛けは、現在こそ最も重要な問題提起となっているのではなからうか。

注

- 1) I. C. McCormick, *A Defence for "Hard Times"*, *The Dickensian*, 1916, p. 189
- 2) Coketown は Manchester をイメージして作られた町であるが、作品発表当初、作中に登場する労働運動の agitator, Slackbridge のような人物は非現実的で、労使問題の描写等に甘さがあると評価されていた。
- 3) Ed. by George Ford and Sylvere Monod, *Hard Times*, A Norton Critical Edition (New York, n.d.), p. 335
- 4) *ibid.*
- 5) *Household Words*, No. 184, Saturday, October 1, 1853
- 6) 作者は1858年3月に妻 May Catherine と別居するが、この現実生活での苦悩が、Blackpool と Rachael との関係、又 Louisa と Bounderby の奇異な結婚に反映されている。
- 7) 本論で示すページは、A Norton Critical Edition, *Hard Times*, edited by George Ford and Sylvere Monod のそれを示す。
- 8) 旧約聖書 Gen. 29-35 に登場する Jacob の妻をイメージして造り出されたキャラクターだと言われる。
- 9) 作品の中で、Louisa は一貫して父 Gradgrind の優しさを、無意識にはあるが感じ取っており、それがこの父娘を繋ぎ止める絆になっている。
- 10) Dickens Working Plan によれば、Mrs. Gradgrind の構想の際、Mrs. Gradgrind — or Miss? Wife or sister? *Wife*. と作者は迷っていた事が示されている。この迷いはそのまま作者の現実生活での悩みを思い起こさせ、Mrs. Gradgrind が彼の妻 May Catherine を心の何処かでイメージしていたとしたら、この作品での夫人の役割も頷ける。
- 11) *Household Words* に連載されていた時には副題は付けられておらず、1854年一巻本として出版された時から作者によって副題が付けられた。
- 12) *Household Words*, No. 184, Saturday, October 1, 1853
- 13) *ibid.*
- 14) F. G. Kitton, *Charles Dickens, His Life, Writings, and Personality* (London, n.d.), p. 231 によると、Ruskin はこの作品を評して：
"Allowing for his manner of telling them, the things he tells us are always true. I wish that he could

Hard Times

think it right to limit his brilliant exaggeration to works written only for public amusement: and when he takes up a subject of high national importance, such as that which he handled in *Hard Times* that he would use severer and more accurate analyses...”と述べている。

—平成 7 年10月16日 受理—